

# 〈神戸の叔母さん〉のはなし

鏡花幼年期回想小説における人稱について

塩崎文雄 ●文学科教授

はじめに

本日のシンポジウムをお引き受けしたことを後悔しています。まず、本日のシンポジウムに向けて、と題した杉山さんの委曲を尽した基調報告が出ている。さらに、鈴木さんは学生の意識調査を通して、永澤さんは西洋図像を読むことから、松山さんは英語における人稱の問題から、劉さんは韓国の近代化と韓国語という観点からといった風に、それぞれ日本語を相対化する立場からお話しになった。それに対して、私はこの場にいらつしやるみなさんにとってほぼ自明の母語である日本語の立場から、しかも日本語としては特殊な用法である文学言語の立場からしかお話しできない。大変なことをお引き受けしたと後悔しているわけです。そこで、と言うわけでもありませんが、変なタイト

ルを掲げました。葦アサの髄から天井を覗いたら何が見えるかほどのつもりです。お話するのは鏡花の幼年期回想小説ですが、作品論や作家論をやるつもりは毛頭ありません。鏡花の幼年期回想小説を素材に、〈子どもと〈神隠し〉という二つの補助線を引いて、そのなかからゆらぎ立ってくる〈わたし〉の諸相を考へること、本日の責を果たせたらと思っています。

最初に取り上げたのは、柳田国男の「山の人生」(一九二六・一一)の文章です。〈神戸の叔母さん〉と題してもいいような〈神隠し〉のエピソードが、そこには語られています。幼い時分のある日、「しきりに母に向って神戸には叔母さんがあるか」と尋ねていた〈自分〉が、母親のちよつと目を離れた隙にいなくなって、何

時間かの中に「家から二十何町離れた松林の道傍」で発見された思い出です。

これも自分の遭遇ではあるが、あまり小さい時の事だから他人の話のような感じがする。四歳の春に弟が生まれて、自然に母の愛情注意も元ほどでなく、その上にいわゆる虫気があつて機嫌の悪い子供であつたらしい。その年の秋のかかりではなかつたかと思う。頻りに母に向かつて神戸には叔母さんがあるかと尋ねたそうである。じつは無いのだけれども他の事に気を取られて、母はいい加減な返事をしていたものと見える。その内に昼寝をしてしまったから安心して目を放すと、しばらくして往つてみたらもういなくなつた。(略)正式に迷子として発見せられたのは、家から二十何町離れた松林の道傍であつた。(略)どこへ行くつもりかと尋ねたら、神戸の叔母さんのところへと答えたそうだが、自分の今幽かに記憶しているのは、抱かれて戻ってくる途の一つ二つの光景だけで、その他はことごとく後日に母や隣人から聞いた話である。

「山に埋もれたる人生あること」を、自己の体験に即して考えようとした柳田のモチーフは明確ですが、い

私の興味をひくのは、このエピソードが柳田の想像力の最初の発動として物語化されていることです。そしてそこに見られる物語行為は、二つの顕著な特性を備えています。

まず第一に、〈神隠し〉の原因・理由がきわめて合理的に意味づけられていることです。「いわゆる虫気があつて機嫌の悪い子供であつた」という風に、自己の性情に原因・理由の一つが求められています。あるいは「四歳の春に弟が生まれて、自然に母の愛情注意も元ほどでなく」なつた、おろそかになつたといった境遇の変化に、もう一つの原因・理由は求められています。

第二に、ほかならぬ「自分の遭遇」として語られた〈神隠し〉体験であるにもかかわらず、〈神隠し〉などという不可思議な衝動がこみあげてくる情動のプロセスは、ついに語られないということとす。〈不可思議な〉という定義自体が、柳田にとつてはことばの綾にすぎないので、それが説明可能な衝動であることは第一の特色として述べました。それはともかく、大事なのは非日常的な情動がその生起・発展・変化・消滅のプロセスとして語られることがない、という点です。「あまり小さい時の事だから他人の話のような気がする」、「ことごとく後日に母や隣人から聞いた話である」といった風に枠取られて、内部からではなく外側から、子どもの視点からではなく大人の常識から〈神隠し〉

体験はなぞられています。

では、鏡花作品ではそのところはどうかになっているのか。

鏡花が「神隠し」体験をくりかえし作品化したことはよく知られています。結論に先まわりして言えば、

鏡花文学は「神隠し」体験——つまりアイデンティティの危機を、外側からではなく内部から物語ろうとしているのではないか。柳田が性情と境遇というかたちでいとも簡単に片づけた「魔に魅ままれる」ということを、自己内部の闇・分節しえないなにか・名状しがたいアモルフなもの噴出として、あらためて掘り起こそうとする努力のうちに、鏡花幼年期回想小説の営みはあるのではないか。とりわけ、「神隠し」体験の小説化の過程において、「わたし」という人称を問題化するのではないか。そうした仮説を立てて、これ以後のお話したいと思います。

なお、これから見ようとする鏡花における人称の「へれ」は、一つは新しい表現領域を切り拓こうとするところから生ずる「へゆれ」であるわけですが、それと同時に、「わたし」の融解と噴出との両義的な「へゆれ」のなかで自己存在それ自体を同定できないこと——だからこそ「魔に魅ままれる」わけですが——それゆえに生ずる「一人称の誕生」のすぐれた言表行為として位置づけたいと思っています。

## 1 鏡花幼年期回想小説の輪郭

十九世紀の最期の五年間の、鏡花の作品と幼年期回想小説の主だったものを掲げておきます。○※の施したるものが幼年期回想小説です。

### 『夜行巡査』

一八九五〈明28〉・四

### 『外科室』

一八九五〈明28〉・六

### 『鐘声夜半録』

一八九五〈明28〉・七

### 『貧民俱樂部』

一八九五〈明28〉・七

### ○『一之巻』、『誓之巻』

一八九六〈明28〉・五、  
一八九七〈明29〉・一

### ○『化銀杏』

一八九六〈明29〉・二

### ○『蕨谷』

一八九六〈明29〉・七

### ○『照葉狂言』

一八九六〈明29〉・一一、  
一二

### ○『龍潭譚』

一八九六〈明29〉・一一

### ※『化鳥』

一八九七〈明30〉・四

### ※『辰巳巷談』

一八九八〈明31〉・二

### ※『鶯花徑』

一八九八〈明31〉・九、一〇

### 『通夜物語』

一八九九〈明32〉・四、五

### 『湯島詣』

一八九九〈明32〉・一一

### 『高野聖』

一九〇〇〈明33〉・二

一覧表に若干の補足説明を加えておきます。ここに

掲げた作品に先立って、鏡花には「冠弥左衛門」や、滝の白糸で知られる「義血俠血」等の初期作品群があります。また「夜行巡查」から「貧民倶楽部」にいたる作品群は、通常「観念小説」と呼び做わされているものです。口清戦争下に生じた社会的諸矛盾を性急かつ声高に弾劾した作品群で、鏡花はこれらの作品によって文壇に登録されました。

○※を施した作品群が幼年期回想小説です。もっとも、幼年期回想小説というジャンルは、必ずしも鏡花の独創ではありません。この時期、若松賤子の「少公子」（二八九〇・八一―二八九二・一）、森鷗外の「即興詩人」（二八九二・一一―、単行本一九〇二・九）といった大きな翻訳がありましたし、鏡花がライバルとして強く意識した樋口一葉に「たけくらべ」（二八九五・一一―二八九六・一）を初めとする作品があることはよく知られています。

しかし、「子ども」と「神隠し」といった二つの補助線を設けることによって幼年期を描いた小説は、これは鏡花の独創と言ってさしつかえないように思われます。※の作品がそれに該当します。このことを別の観点から説明すれば、○の作品は成長した一人称の語り手が少年であったころの自己と年上の女性との甘美な交渉を物語ったものであるのに対して、※の作品は、語り手が隠蔽されたままで、幼時体験が幼児の心性に

即して物語られているということです。

幼児の認識や心性の界域はある意味で狭窄ですから、自己の内部や外側には分節化しえないもの・名状しがたいなにか・存在の闇といったものが数多く横たわっている。つまりそれらとの接触と、接触によって生ずる混乱とが「神隠し」とか「魔に魅ままれる」体験として物語られているということです。そしてそうした事態のなかで、「わたし」は存在の枠組を喪失する。あるいは、枠組自体が融解してしまう。そうした状況に見舞われた「わたし」が現実世界に帰還して来るとき、融解・喪失された「わたし」を弥縫するというか、再構築しなければならぬ。そこにゆらぎ立ってくる「わたし」の諸相を考えたいと思うわけです。

なお、幼年期の闇に深く垂鉛を下ろそうとしたこうした試みは、鏡花においてはこの時期特有のもので、「高野聖」に端的なように、不可知なもの・異常なもの・アモルフなものへの関心を自己内部の深淵に手まさぐることから、それを山中孤家の美女に想定するといった風に外化・敷衍することによって物語に編んでゆく方向に、以後の鏡花文学は展開してゆくと言えます。

それはともかく、以下、鏡花の幼年期回想小説のなかにゆらぎ立ってくる「わたし」の諸相について考えてみたいと思います。

## 2 『龍潭譚』における「われれ」

最初は「龍潭譚」について、お話しします。念のため、下手な梗概をつけておきましたので、ご覧ください。

\*

ある午さがり、「われれ」は「姉上」の戒めを破って出かける。ゆるやかに広がるつつじの海のなかで毒虫に刺され、かろうじて里に辿り着くが、家に帰りがねて「かたる」の子どもたちと「かくれあそび」をしているうちに日暮れになり、仲間は姿を消してしまふ。そこに現れた美女に導かれて「をぐらき処、孔の如き空地」に身を潜め、人々の目を晦ます。姉上への呼ぶ声に孔を出、御水洗で毒虫に刺された顔を冷やそうとして自分の面変りを知るばかりか、「姉上」にも自分を認知して貰えない。昏倒した「われれ」は美女の棲家で介抱され、翌日老爺に送られて家に辿り着く（このくだりは霊水を浴びる美女の姿を初めとして、「高野聖」を思わせる）。家には帰つたものの、美女恋しさに隙あれば家をあくがれ出ようとして柱に括りつけられ、拘禁される。そうこうしているうちに、ある夜豪雨が降って、美女の棲家の「九ツ餅」は永久に水底に沈んでしまふ。

\*

ここに語られているのは、柳田国男の「神戸の叔母さん」と同様な、「神隠し」体験です。しかも、柳田がそれを外側からしかなぞらなかつたのに対して、鏡花はまさに魔に魅ままれた「われれ」の心性に即して語っている。そこに、この作品の画期性はあるといえます。「われれ」が魔に魅ままれるくだりを挙げてみましょう。

極めて丈高き女なりし、其手を懐にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「此方において。此方。」

といひて前に立ちて導きたり。見知りたる女にあらねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで、隠れたる兎のありかを教ふるとさとりたれば、いそぐと従ひぬ。（全集卷三、一〇頁。以下、引用はすべて岩波版全集によつた。）

そのときどきの事態の進捗のなかではごく自然な行為が連鎖してゆき、いつの間にかとんでもなく遠いところへ連れ出されてゆく。「あふ魔が時」がここには巧みに描かれています。ただ、「龍潭譚」は幼児の心性に即して物語が展開している反面、語り自体は若松賤子の「少公子」に倣つた、きわめて整然たる文語文脈によつてなされている。そういった矛盾もまた持ち合わ

せた作品です。作品の冒頭を掲げてみましょう。

日は午なり。あら、木のたらく／＼坂に樹の蔭もなし。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひてたゞ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき処に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいてぬ。(巻三、三頁)

へわれの歩行につれて周囲の景色が展開する、きわめて整序された語りの形態を取っています。そのことの端的な言表が「ありくにつれて汗少しいてぬ」でしょう。こうした語りが四、五歳の幼児の語りであるはずはありません。現に語りの「現在」は、物語の「現在」から二〇年後？の「へいま」のようです。もつともそのことは作品の末尾にいたるまで、読者には知らされません。

あはれ、磔を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血気なる友のいたづらを叱り留めつ。年若く面清き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧を湛へたる淵に臨みて爾然とせり。(巻三、三三三頁)

鴨外の『文づかひ』(一八九一・一)がその冒頭に小林士官の語りと断っているのと、ちょうど逆になっています。言うなれば、読者は読みの過程において背負投げを喰わされるわけです。先に幼児の心性に即して物語が展開している反面、語り自体は整然たる文語文脈によってなされている矛盾、と述べたのはそのためです。

それはともかく、『龍潭譚』において、一人称はどのように出現するのでしょうか。

口惜しく腹立たしきま、身の周囲はこと／＼く敵ぞと思はる。町も、家も、樹も、烏籠も、はたそれ何等のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見て其弟を忘れしことあり。塵一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化したるにて、恐しきあやしき神のわれを惱まさむとて現じたるものならむ。さればぞ姉がわが恢復を祈る言もわれに心を狂はすやう、わざと然はいふならむと、一たびおもひては堪ふべからず。(巻三、二九頁)

家に連れ戻された「へわれ」がこれまでの「姉上」との幸福な二項結合を失って、隙あらば九ツ罅の美女を慕って家からあくがれ出ようとする場面です。自分を

ひとたび見捨てた姉との幸福な結合を失うことによつて、〈われ〉は〈姉上〉との関係にアイデンティファイすることができなくなつたわけです。それゆえに〈われ〉：〈われ〉：〈われ〉という風に、〈われ〉は無限に同義反復されていきます。従属詞を伴わない〈われ〉の反復は、自己内部の混乱を意識の明るみに引き出すことを通じて〈われ〉を同定する試みである、と言つても同じことです。『龍潭譚』の一人称はそうしたものとしてありました。

3 〈私〉／＼〈僕〉の世界——『化鳥』の場合——  
例によつて、最初に拙い梗概を掲げておきます。

\*

「私がまた母様のお腹おなか中に小さくなつて居た時分」に、父は他人に驅されて、桜山も桃谷も梅林も菖蒲池もみんな盗られて、「口悔しい、口悔しい」と言いつつ憤死する。残された〈母様〉と〈私〉とは市はずれの橋番をして、肩を寄せあつて暮している。〈母様〉は世の中を恨んで世間の人をみんな畜生よばわりをしているらしく、〈私〉もまた、〈母様〉の目を通して世の中を見ている。ところがあるとき、川に落ちて危うく溺れそうになつたのを見知らぬ他人に助けられ、後で「一体助けて呉れたのは誰です」と〈母様〉を問い詰める。〈母様〉は困つて（翼つばの生えたくつくしい姉さん）だ

と教える。〈私〉はそのお姉さんを求め続けるのだが、お姉さんにはついに会うことができない。

\*

『化鳥』は隙間もなく一体化した母子の間に生ずる微妙な亀裂を描き、あわせて亀裂の契機を抱えているがゆえにいつそ母との合一をばげしく希求する少年を描いた作品です。〈私〉意識の覚醒が、とりもなおさず母子一体化・自他融合のユートピアの解体である以上、〈私〉は永久に未生以前の母の胎内にまどろもうとします。そのことは、作品末尾のつぎのようなくだりに明らかです。

雨も晴れたり、ちやうど石原もいるだらう。母様はあ、おつしやるけれど、故ゆゑとあの猿さるにぶつかつて、また川へ落ちて見ようか不知しり。さうすりやまた引上げて下さるだらう。見たいな！ 羽つばの生えたくつくしい姉さん。だけれども、まあ、可いい。母様が在らつしやるから、母様が在らつしやつたから。（巻三、一四九頁）

ことに「母様が在らつしやるから、母様が在らつしやつたから」は、意識のゆれと語りの時点のゆれとのふたつながらを含みこみつつ、母の胎内にまどろみだつたという願望を描いて、なかなか美しい叙述です。ところで、『化鳥』は鏡花の最初の口語体小説の試み

でもあります。作品冒頭を見てみましょう。

愉快いな、愉快いな、お天気が悪くつて外へ出て遊ばなくつても可いや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしょ濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。菅笠を目深に被つて、激に濡れまいと思つて向風に俯向いてるから顔も見えない、着て居る蓑の裾が引摺つて長いから、脚も見えないで歩いて行く、背の高さは五尺ばかりあらうかな、猪としては大なものよ、大方猪ン中の王様が彼様三角形の冠を被て、市へ出て来て、而して、私の母様の橋の上を通るのであらう。

トかう思つて見て居ると愉快い、愉快い、愉快い。(巻三、一一四頁)

見られるように、幼児の口頭語の性格を顕著にかき立てた、屈伸性に富んだ口語文脈によって、作品は貫かれています。先に述べた「龍潭譚」と比較して、その表現に一日の長があることは、たやすく諒解していただけるでしょう。ただ、その口頭語は「東京語」として発せられているので、そのあたりに鏡花文学の特性と時代の制約とを見ることができのですが、論が多岐にわたることを恐れて、いまは指摘するだけにとどめておきます。

そうした「化鳥」のなかで、〈私〉はどのように出現するのでしようか。

母子一体化・母子融合の世界においては、少年は一人称すら用いる必要がありません。そのことは「愉快いな、愉快いな」の文に端的に窺われます。それに対して、そうした母子一体化の世界が「先生」に代表される世間の相対化に晒されるとき、〈私〉および〈私の母様〉はあらためて意識の表層に上ってくるようです。そのことは少年が教室で自己を語るつぎのくだりによって明らかでしょう。

それから、(筆者注)先生が( )だつて、犬や、猫が、口を利きますか、ものをいひますか)ツて、さういふの。いひます。雀だつてチツチツチツツツて、母様と、父様と、兄と朋達と皆で、お談話して居るぢやありませんか。僕眠い時、うつりして居る時なんぞは、耳ン処に來て、(略)僕ね、あのウだつてもね、先生、(略)僕分りませんもの。(略)それから僕の内の橋の下を、あのウ舟漕いで行くのが何だか唄つて行くけれど、(略)(巻三、一一九頁)

ここにあるのは、少年が外界と接触する際に〈僕〉を用いることを通して、少年と母との二項結合の世界



の内部に微妙な亀裂が走るといふ機微です。その微妙な亀裂を意識しつつ、あらためて母との二項結合を希求するとき、〈私〉意識がひそかに侵入してくるといふことでもあります。

だつて、私、母様のおつしやること、虚言だと思ひませぬもの。私の母様がうそをいつて聞かせますものか。

先生は同一組の小児達を三十人も四十人も一人て可愛がらうとするんだし、母様は私一人可愛いんだから、何うして、先生のいふことは私を欺すんでも、母様がいつてお聞かせのは、決して違つたことではない、トさう思つてるのに、先生のは、まるで母様のと違つたこといふんだから心服はされないぢやありませんか。(巻三、一一三—一二四頁)

このように母の正当性をくりかえし言い募らざるをえないこと自体に、母との別れが内包されているといつても同じことです。世の中を呪咀し排撃しつづける母子は、(翼の生えたくつくしい姉さんの登場をまたずとも、〈僕〉／〈私〉の使い分けを契機として、すでに解体を始めているのです。だからこそ、〈私〉は「母様が在らつしやるから、母様が在らつしやつたから」と

つぶやくのです。言い換えれば、少年と母との二項結合の世界に他者が介入することによって初めて〈私〉意識が誕生するので、〈私〉という人称の誕生はそうした二項結合の世界の喪失の痛みと不可分だということ

です。  
4 「鶯花徑」の達成——〈坊や〉／〈私〉の交替——  
例によって、最初に梗概を掲げておきます。

\*

看護婦に連れられて鬼子母神に行く途上で、心神喪失に陥つた〈私〉の意識が次第に覚醒してくる前半部と、〈私〉と看護婦(「若い母様」と高等学校教授司との間に夢想された幸福な擬似家族が、司の自殺で崩壊する後日譚とに分かれる。

父母と幸福な幼年時代を送っていた〈私〉は母を病気で失つてしまふ。〈私〉が「母様は、父上、母様は、父上」と亡母を強烈に慕うあまり、父は発狂して〈私〉を殺そうとし、誤つて隣家の子どもを殺し、自分もまた自殺する。あまりに強烈な惨劇に立ち会つた〈私〉も心神喪失に陥つて、施療院に入れられる。その身代わりになつた子どもというのが、実は〈私〉を介抱している看護婦が「乞食」に襲われて身ごもつた子なのである。看護婦は自分の子どもが身代わりになつた

《私》の病を直そうと、原体験の場所に《私》を導き、《私》の母の好きだった唄を歌う。そこに行きあわせたのが、高校教授の司である。月下に三人の寄り添う姿に理想的家族像を認めた「乞食」は贖罪のために自分を殺し、《私》をかすがいにすることによって、看護婦の新しい未来を期待する。

半年ばかりこの擬似家族は平安な日々を送るが、看護婦のなかにみずからの代母を見ていた司は、《私》の（母様は、父上）というあくなき訴えの前に、看護婦を母とも妻ともみなす矛盾に耐えかねて、自殺してしまう。

\*

これまでの「龍潭譚」「化鳥」と較べてみても、大入り組んだ複雑なストーリーリーとということができません。入り組んでいるのはストーリーばかりではありません。作品の時間構造も四重構造になっています。まずは、《わたし》が《若い母様》に連れられて鬼子母神に詣でる《いま》があります。また、その途上で想起される二つの《過去》——一つは《母様》と一体化していた甘美な《大過去》、もう一つはその強烈さのあまりに《わたし》の記憶を切断した《父上》の惨劇を中心とする《小過去》——の二つの《過去》があります。さらには、司の自殺を含めて、生起したすべてのことからの意味を尋ねるために語りを行っている《語りのい

ま》が全体をゆるやかに統括しています。

そうした複雑な作品構造に見合つて、口頭語の屈伸性と時制の意識的横断を最大限に励起した、きわめてテクニカルな語りが行われています。例を挙げてみましょう。

ちやうど病氣でおよつていらつしやつた母様  
が私を抱いて起きて出て、二階の北窓を開けなすつた。束髪、毛のさきのもつれたのが、膝に抱かれた其坊やの頸にひやくとして溢れた。其時真黒な襟をつけた水色の薄い着物で、絶々しう、風のすさんでる真暗な外へ、氣高い顔をお出しなすつた。唯見ると、頂に小さな松明、まるで炎なのが中空に燃上つて、左右の山の土は赤く、うらの峰は真黒で、麓の熊笹の枯れたのもありくくと見て取られたあかるい中を、手の細い、白いので指さして、——（坊や、きれいだね。）とおつしやつた。

——松は、あれは、確にそれと、驚の片翼を拡げて植ゑたやうな、いまは枝も葉も何にもない根ひろがりに幹の裂けくになつたのを、仰いて星の下に見た。

……と思ひました。

爾時フと心着くと、然うすると、坊やは片手を

挙げて、人の胸とおもふあたりで曳かれながら、  
両側に森のある薄暗い小路を歩行いて居たので。

(略) また、何の道かうなつた上は、仮令、私の  
手を曳いて居るものが、どんなに恐い、邪慳な、  
残酷なものであつたにしろ、振離して逃げようと  
いふことは出来ないものとあきらめても居たのら  
しい。(巻四、三八九―三九〇頁)

〈若い母様〉(＝看護婦)に手を引かれて鬼子母神に  
詣てる途上です。「両側に森のある薄暗い小路を歩行  
て居た」とあるのが、その証拠です。その「いま」に  
〈大過去〉がいわば噴出してきているわけで、冒頭の  
「ちやうど」以下の〈母様〉に抱かれて峰の一本松が  
燃えるのを眺めた記述がそれに該当します。それとは  
別に、「……と思ひました」や「(あきらめても居た)  
のらしい」といった箇所、これらの総体を物語る「語  
りのいま」がきっかりと象嵌されています。「語りのい  
ま」については、それとは別の観点から補注を施すこ  
ともできます。「およつていらつしやつた」「開けなす  
つた」「お出しなすつた」「おつしやつた」等の待遇表  
現の駆使は「語りのいま」を勵起する徴だからです。  
いづれにしても、ここには大変複雑な時間構造が埋設  
されているので、先に、時間の四重構造と述べたゆえ  
んです。

さて、肝心の人称の問題は、『鶯花徑』ではどうなつ  
ているか。いま挙げた文章で、その問題を考えてみま  
しょう。

①ちやうど病気でおよつていらつしやつた母様が私  
を抱いて起きて出て、……

②束髪、毛のさきのもつれたのが、膝に抱かれた其  
坊の頸にひやくとして溢れた。

③爾時フと心着くと、然うすると坊やは片手を挙げ  
て、人の胸とおもふあたりで曳かれながら、……

④仮令、私の手を曳いて居るものが、どんなに恐い、  
邪慳な、残酷なものであつたにしろ、……

見られる通り、人称においても、〈私〉と〈坊や〉と  
が交替し、輻輳(クロス・オーバー)することで、不  
思議な眩暈をもたらします。そうした人称の複雑な交  
替はまた、心神喪失の〈私〉の内部を表現するのに似  
つかわしい言表と言えましょう。

ところで、そうした〈私〉と〈坊や〉の交替はなぜ  
起きるのか。そこに一定の法則性はあるのか。それが  
つぎの課題でしょう。もう一箇所、用例を挙げておき  
ます。

いまわづかのあひだ、母様に抱かれたのと思つ  
たやうでもあるけれど、違つた。あの矢張り誰か  
がつかまへて居たのである。(略)心細くツて俯向

いとると、白い手が背後から出て、轟くやうな坊やの胸の動悸を静かに撫てさげた。

さすつて頤のあたりへ米たが、気が着かず油断して居るらしかつたから、思切つて喰ひついた、前歯に悪魔の指がカチリとあたる。

其ま、不思議に手を動かさないから、俯向いて瞳を寄せて、——白魚のやうな紅さしに指環を一個嵌めて居る。私の歯は、其の彫刻した鳥の喙がついばむで居る木の実に擬へた小さな紅寶石をくはへて居たのをきつぱり見た。(巻四、三九五頁)

《私》は《若い母様》(＝看護婦)に手を曳かれて鬼子母神に詣てる途上である、と先ほど述べました。しかし、それはあくまで便宜上の説明なので、心神を喪失し意識の溷濁した《私》は、自分の手を曳いているのが《若い母様》とも看護婦とも、実のところ認知していません。先の用例では、それは「恐い、邪慳な、残酷なもの」と言われています。後の用例では「誰か」もしくは「悪魔」と捉えられています。煩わしいので一々は断りませんが、以下、「鬼」↓「手を曳いてる人」↓「青みを帯びて練衣のやうな真白な服装の、ほッそりしたの」↓「看護婦といふものの服を着けた、二十七八りの女」、そして「若い母様」といった風に、自分の手を曳いているものの実体は意識の水底から水面に

向つてゆるやかに浮上してゆくように、漸層的に明らかになるように物語られています。

発表時間も残されていないようですので、大急ぎで結論だけを言えば、自分の手を曳いているものを《母様》と錯覚するとき《坊や》は発語され、「悪魔」「鬼」等と見做すとき《私》が発語される、といった傾向性を抽出できるようです。《母様》との二項結合のなかにまどろんでいるとき《坊や》は発語され、《他者》と直面せざるを得ないとき《わたし》が自覚的に定立される、と言つても同じことです。

鏡花文学における《わたし》の発見は、母との一体化・融合の喪失の痛みとともにあり、あわせて《他者》の発見とともに行われたということとす。それが《神隠し》を契機として描かれていること、眩暈とともに自覚されていることについてはすでにくりかえし述べて来ましたので、あらためては申し上げません。

結びにかえて

ただ、鏡花は《他者》に開遠された《わたし》がその孤独にたえながら、同じように孤独な《他者》とあらためて人間関係を形成してゆく、——そういつた《近代》に対して徹底的に背を向けるといつた生き方を選んだこともよく知られています。母との一体化の世界に常に回帰し、そこで安樂にまどろむことを鏡花は希

求しつづけたわけです。そうした回帰は、いわば無時間的に鏡花文学のなかに噴出します。つぎのくだりは、作家である新吉が二階の書齋に閉じこもっているところに、妻のお君が押しかけてくる様子を描いたものです。

日暮前に、寂然閑として、小雨でも降つて、うら寂しいと、故と、凡そ可愛くつて堪らないと云ふ目を細りとさして、銀杏返しに結つた母さんが、階子段から顔を出す。

「お坊や、」

「う、」

とあやふやな返事をする。

「目ン目お覚し、お、い、兎だね、母さんが寂しいからね、下階へおいてな、遊びませうよ。」

「可厭だあ。」

「そんなら、此処におとなしくしておいでかい、い、兎だね。」

「あ、可い兎だよ。」

「お目覚を上げませうねえ。」

「おくれよ、母ちゃん。」

と黒繻子の襟をするりと、一寸手で扱きながら、「さあ乳をおあがり」（「爪びき」一九一一〈明44〉・

一一二、卷一四、二五六―二五七頁）

〈夫〉―〈妻〉の關係がたやすく〈母〉―〈子〉の親族關係に移項される。こうした狎れ合いは奇妙というか、氣味が悪いというか、少なくとも第三者にとつてはかなり居心地の悪いものです。

日本語の人称の問題を考へるとき、人間關係がつねにこうした二者結合の場所に転落もしくは退嬰してゆくことに注意を払わなければならないので、母との一体化という甘美な世界の持つその甘美さに甘んずることの危険は言うまでもありません。そうした状況をどう突破してゆくか、乗り越えてゆくかが本日のシンポジウムの最終的な課題なのでしょうが、いまは問題点だけを指摘して報告を終えたいと思います。